

米国（ニューヨーク）経済視察団報告書

令和6年9月19日(木)～9月25日(水)



令和7年3月



HIROSHIMA KEIZAI DOYUKAI

広島経済同友会

国際委員会

◆ 目 次 ◆

・はじめに	団長 武田 龍雄	1
・米国（ニューヨーク）経済視察団名簿		2
・米国（ニューヨーク）経済視察団日程		3
《所 感》		
米国（ニューヨーク）経済視察 全体を通して.....	副団長 小田 宏史	4
《視 察》		
三井不動産アメリカ	武田 保介	6
	長沢 伸彦	8
《講 演》		
共同通信社（ワシントン支局）	荒田 秀和	10
	大塚 和永	13
《視 察》		
Dassai Blue Sake Brewery	岩橋 浩二	15
《所 感》		
ジャズクラブ・バードランド	吉田 豊	16
《市内視察》		
ウォール街、9. 11メモリアル	加藤 雅規	17
ニューヨークリバークルーズ、エンパイア・ステート・ビル	細田 宗嗣	20
	高木 潤	
《講 演》		
三井住友銀行ニューヨーク支店（金融情勢関連）	荒谷 悦嗣	22
	金築 等	24
《雑 感》		
ニューヨークあれこれ	堂本 高義	26
	中谷 圭吾	28
	高原 哲也	30
	野口 隆志	32
《視 察》		
J F K空港視察（日本航空）	川西 亮平	33
《所 感》		
ニューヨークの食	小川 恭史	36
	佐藤 卓己	
	杉之原祥二	
・おわりに	副団長 山本慶一郎	40

～ は じ め に ～

広島経済同友会
米国（ニューヨーク）経済視察団
団長 武田 龍雄
(広島信用金庫 会長)

当会では、令和6年9月19日（木）から25日（水）の7日間にわたり、ニューヨークに経済視察団を派遣いたしました。

平成28年度の「カナダ・アメリカ経済視察団（バンクーバー・ポートランド）」以来8年振りとなる今回のアメリカへの視察につきましては、我が国のみならず、世界の政治、経済、安全保障などの面で引き続き多大な影響力を有する同国について理解を深めるとともに、大統領選挙を間近に控えた現状を体感することにより、今後の当会の活動や会員所属企業の戦略立案に役立てることを目的としております。

現地では、三井不動産アメリカ社の「ハドソンヤード大規模再開発プロジェクト」や日本酒「獺祭」の「アメリカの蔵元」、高級デパート「バーグドルフ グッドマン (Bergdorf Goodman)」とスーパーマーケットチェーン「トレーダー・ジョーズ (Trader Joe's)」などの視察に加えまして、共同通信ワシントン支局による大統領選挙にかかる最新情勢の解説、三井不動産と三井住友銀行による各業界の立場からみたアメリカの事業環境の解説など、多彩な要素を詰め込んだ経済視察を実施いたしました。

高騰していると言われる物価についても注意深く観察してまいりましたが、「為替」の要素などもあり、想像以上に拡大した「両国の物価水準の差」を目の当たりにすることとなりました。日本から現地に派遣されておられる各社の社員からの「生の声」は、その切実さを物語っておりました。

一方で、ニューヨークという都市につきましては、多くの大都市に共通する側面なのかもしれませんが、それなりの金銭的・時間的余裕があれば楽しみが尽きない「多くの人々を引き付ける魅力的な都市」であると改めて認識することができました。

いずれにしましても、報道等で取り上げられるような機会も多く、日本にいても他の都市と比較して情報量が多いはずのアメリカ・ニューヨークであっても、「現地」での見聞によって学ぶことや気付くことが想像以上に多く、「海外経済視察」の必要性や重要性について、改めて強く感じた機会となりました。

それぞれの視察先や交流会などの詳しい状況は、各団員の報告をご覧くださいこととして、団長としては、団員の皆様のご協力により、無事に視察日程を終えることができ、安堵いたしております。また、今回の視察の成果が、今後の同友会活動に反映されることを期待しております。

結びにあたりまして、ご参加いただいた団員各位、視察先の手配などお世話をいただいた国際委員会の皆様及び関係者の方々に対し心より感謝申し上げます。

米国（ニューヨーク）経済視察団 名簿

（団 長）

武 田 龍 雄 広島信用金庫 会長

（副団長）

小 田 宏 史 (株)もみじ銀行 取締役会長
山 本 慶一朗 (株)中国新聞社 社主兼常務取締役

（団 員）

荒 田 秀 和	広島ガス(株)	常務執行役員
荒 谷 悦 嗣	(株)荒谷建設コンサルタント	代表取締役
岩 橋 浩 二	三井不動産(株)中国支店	副支店長
大 塚 和 永	三菱商事(株)中国支社	支社長
小 川 恭 史	日塗(株)	代表取締役
加 藤 雅 規	(株)加藤組	取締役副社長
金 築 等	中国電力(株)	執行役員
川 西 亮 平	(株)トータテホールディングス	代表取締役社長
佐 藤 卓 己	(株)サンエス	代表取締役社長
杉之原 祥 二	(株)マナック・ケミカル・パートナーズ	取締役会長兼社長
高 原 哲 也	丸紅(株)中国支社	支社長
武 田 保 介	武田製網(株)	代表取締役社長
堂 本 高 義	堂本食品(株)	代表取締役社長
長 沢 伸 彦	(株)たびまちゲート広島	取締役会長
野 口 隆 志	(株)ノサックス	専務取締役
細 田 宗 嗣	細田林業(株)	取締役
吉 田 豊	白井汽船(株)	代表取締役社長
中 谷 圭 吾	広島信用金庫	副部長
高 木 潤	(株)中国新聞社	記者
谷 口 康 雄	広島経済同友会	事務局長
前 田 朝 子	(株)たびまちゲート広島	(添乗員)

※所属・役職は視察時現在

◆ 日 程 表 ◆

日数	月日・曜日	都 市 名	発着時刻	交通機関	予 定	食 事
1	2024年 9/19 (木)	広島空港 発 羽田空港 着 羽田空港 発 JFケネディ空港 着 空港 発 ニューヨーク	7:40 9:00 11:05 11:00 12:30 午後 17:00 18:30	JL252 JL006 専用バス 徒歩	日本航空機で東京羽田へ 日本航空機でニューヨークJFKへ（12h55m） 時差▲13h 日付変更線通過 到着 入国審査・荷物受取・税関検査 ニューヨーク市内へ 昼食：「Superfine」 市内視察（ブルックリン橋、マンハッタン橋、ハイライン） ホテルチェックイン 夕食：「Frankie & Jonnie's Steakhouse」 ウェスティン・ニューヨーク・タイムズスクエア 泊	- 機 機 昼 タ
2	9/20 (金)	ニューヨーク	9:40 10:00 昼 14:00 16:00 18:30	専用バス 徒歩	朝食：ホテル ホテル出発 企業視察 三井不動産アメリカ社 物件視察 ～12:00 昼食：「Bill's Bar & Burger」 食後、ホテルへ 講演 三井不動産アメリカ社 ～15:30 講演 共同通信社 ～17:30 夕食：「Carmine's Italian Restaurant」 ウェスティン・ニューヨーク・タイムズスクエア 泊	朝 昼 タ
3	9/21 (土)	ニューヨーク ハイドパーク市 ニューヨーク	8:30 11:00 13:40 17:30	専用バス 徒歩	朝食：ホテル ニューヨーク郊外へ（約2h15m） 企業視察 DASSAI BLUE SAKE BREWERY ～13:30 昼食：視察先にて軽食 ホテルへ（約2h15m） 夕食：「Birdland Jazz Club」ジャズ演奏あり ウェスティン・ニューヨーク・タイムズスクエア 泊	朝 軽 タ
4	9/22 (日)	ニューヨーク	午前 午後 17:30	専用バス	朝食：ホテル 市内視察（9.11メモリアル、ウォール街） 昼食：「Tang Pavillion」 市内視察（ニューヨークリパークルーズ、エンパイアステートビル） 夕食：「Blue Fin」 ※19:30～ 観劇オプションプランあり※ ウェスティン・ニューヨーク・タイムズスクエア 泊	朝 昼 タ
5	9/23 (月)	ニューヨーク	9:30 10:00 午後 16:30 18:00	専用バス 専用バス 徒歩	朝食：ホテル ホテル出発 講演 三井住友銀行ニューヨーク支店 ～11:30 昼食：「Restaurant Nippon」 市内視察（大型ショッピングセンター、地元スーパーマーケット） ホテルへ 夕食：「Benjamin Steakhouse Prime」 ニューヨーク 泊	朝 昼 タ
6	9/24 (火)	ニューヨーク ニューヨーク空港 発	9:15 10:30 13:20	専用バス JL005	朝食：ホテル チェックアウト JFK空港へ 企業視察 JFK空港第8ターミナル ～12:00 昼食は各自 日本航空機で東京羽田へ（13h15m） 機内 泊	朝 - 機
7	9/25 (水)	羽田空港 着 羽田空港 発 広島空港 着	16:35 18:20 19:45	JL265	到着 入国審査・荷物受取・税関検査 日本航空機で広島へ	- - -

◆【所 感】米国（ニューヨーク）経済視察 全体を通して

広島経済同友会
米国（ニューヨーク）経済視察団
副団長 小田 宏史
(株)もみじ銀行 取締役会長)

この度のニューヨーク経済視察は、当初、アメリカ南部の工場視察や政治の中心であるワシントンDCを巡る案も検討された。しかし、大統領選を控えたセキュリティ強化や移動の手間を考慮し、昨年の反省も踏まえて、最終的にはニューヨーク（マンハッタン）に拠点を置く滞在型の視察となった。私自身、初めてのニューヨークということもあり、7日間の行程の中で、このスケジュールリングが結果的に正解だったと感じている。

マンハッタンはハドソンリバーとイーストリバーに囲まれた島で、通常の移動は橋やトンネル、フェリーに依存している。30路線近い地下鉄が張り巡らされているが、私たちのような視察団にとっては、ガイド付きのチャーターバスが快適な移動手段となった。しかし、マンハッタンの道路渋滞は深刻で、通行税の導入が検討されるほどである。さらに、私たちの滞在中に国連総会が開催されたため、移動時間が予測しづらい状況となった。

それでも、滞在型の視察のおかげで、柔軟にリスケジュールを行いながら、視察や観光の目的を概ね達成できた。また、早朝出発やチェックアウトに備えた荷造りから解放され、参加メンバーは自由時間を活用し、「小さな冒険」や「貴重な体験」を重ねることができた。

全体の印象として、アメリカ経済の力強さを随所を感じたが、特に最初の視察地であるミッドタウン西側の都市開発プロジェクト「ハドソンヤード」は圧巻であった。約11ヘクタールの操車場跡地に人工地盤を作り、約250億ドルを投じてオフィスビル、商業施設、住宅、公共スペースを約8年かけて完成させたもので、現代的な超高層建築や先進的なデザインに目を奪われた。それ以上に、これだけの巨額投資を続けるアメリカのダイナミズムやポテンシャルを感じた。

また、窓越しに見える高層コンドミニアムやオフィスが想像を超える高額で売買・賃貸されていることにも驚いた。アメリカでは、景気のサイクルやパンデミックのようなショックがあっても、基本的に経済は成長し、賃金も物価も右肩上がりである。この国民性から「少々躓いても最後には何とかなる」という発想が根底にあると説明を受け、納得すると同時に羨ましくも感じた。

大統領選挙の動向についてもわかりやすくレクチャーを受け、ニューヨーク郊外のハイウェイでは「TRUMP」と書かれたフラッグを掲げた車列に出くわし、お祭りムードの一端を垣間見ることができた。選挙の行方については予断を許さないが、パートナー国の様々な思惑を超えて、有権者にとって強い経済、強いアメリカの実現に対する期待が最も大きいと感じた。これからの選挙に対して、これまで以上の関心を持って見守りたいと思う。



ニューヨークは世界有数の観光地で、特にマンハッタンは多様な文化や歴史、エンターテインメントが融合した魅力的な街である。摩天楼は、古典的なエンパイアステートビルから近代的なワンワールドトレードセンターまで、新旧の建築が見事に共存している。特にもうすぐ築 100 年を迎えるエンパイアステートビルは、当時の最高水準の技術を駆使、わずか 18 か月で完成したことに驚嘆するしかない。

また、ウォール街から 9.11 メモリアルを歩きながら、ニューヨークの歴史や精神を感じ、繁栄が脅かされた衝撃を乗り越えたアメリカ人の強さを実感した。一方、ミッドタウンでは華やかなネオンと多国籍の人々で活気に満ち、時間を忘れさせるほどであった。

あっという間の 1 週間であったが、滞在中はほぼ好天に恵まれ、快適に過ごすことができた。大きなアクシデントもなく、ニューヨークの活力と魅力を存分に味わうことができた。国際委員会をはじめ、今回の視察の実現にご尽力いただいた方々に心より感謝申し上げる。

◆【視 察】三井不動産 アメリカ 1

武田 保介
武田製網(株)
代表取締役社長

<はじめに>

広島経済同友会の令和6年度海外経済視察（ニューヨーク）は9月19日から25日にわたって行われたが、第2日目に訪問した三井不動産アメリカが参画する大規模開発ハドソンヤードについて概要をレポートする。

<三井不動産アメリカ>

我が国デベロッパーの雄、三井不動産が海外事業を成長分野の一つと位置付けてアメリカに進出したのは1973年であり、その歴史は50年を超える。

2024年3月期において総資産における海外の割合は28.5%であり、その内アメリカの占める割合は70%に及ぶ。

<ミッドタウン>

20世紀初頭から世界経済の牽引、文化の発信地として確固たる地位を築いてきたニューヨークであるが21世紀を1/4経過した現在においてもその地位は不動である。

そのニューヨークの経済を牽引するのはマンハッタン区であり、その中でも昨今注目を集めているのがミッドタウンと呼ばれるエリアである。

<ハドソンヤード>

長い間、未開発エリアであったが2012年の夏季オリンピックのメインスタジアムの候補地とされるもロンドンに敗れて落選したため民間による再開発事業エリアとなった。

ハドソン川に面した敷地約11ヘクタール（東京ドーム2.6個分）に総事業費約250億ドル（約3兆6250億円、1ドル145円とした場合）を投じたアメリカ最大の民間による不動産開発である。

ハドソンヤードの開発は2012年に第1期がスタート。三井不動産アメリカは2015年、55ハドソンヤードの建設から事業参加した。

ハドソンヤードは、

- 10ハドソンヤード（オフィス）
- 15ハドソンヤード（分譲、賃貸住宅、文化施設「The Shed」）
- 20ハドソンヤード（ショッピングモール、30ハドソンヤードと一体建物）
- 30ハドソンヤード（オフィス）
- 35ハドソンヤード（住宅、ホテル）
- 50ハドソンヤード（オフィス）



55ハドソンヤード（オフィス）

上記の高層ビル、ショッピングモール、文化施設、モニュメントから構成されており、そのうち三井不動産アメリカが開発に携わったのは55ハドソンヤードと50ハドソンヤードであり事業シェアは90%である。

55ハドソンヤードは敷地面積1,120坪、延床面積31,500坪、地下2階、地上51階建、総事業費約2,000億円。

50ハドソンヤードは敷地面積1,932坪、延床面積81,200坪、地下3階、地上58階建、総事業費約6,000億円超という超巨大プロジェクトである。

従来タイムズスクエア止まりだった地下鉄7番線を1.6キロ延長させて50ハドソンヤードと地下直結する新駅「34丁目」を開業させたほどの事業インパクトを持つ。

ハドソンヤードはマンハッタンでは稀有な新築オフィス、魅力的なショッピングモール、最先端のレストラン、高級なホテルや住宅、様々な文化施設を備えた魅力あふれる街でありコロナ禍を経て”Return to Office”を推進する企業から「従業員が足を運びたくなるオフィス」と高く評価されており、リーシングも順調に推移している。

＜おわりに＞

当日は午前中に物件視察、午後に講演というスケジュールであったが、視察団を快く受け入れ終始笑顔を絶やさず懇切丁寧に説明して下さった三井不動産アメリカの久末様、安田様、辻様の三氏には心からお礼を申し上げたい。また今回の視察を企画した広島経済同友会及び国際委員会に対してもこの場を借りて感謝申し上げたい。



◆【視 察】三井不動産 アメリカ 2

長沢 伸彦
(株)たびまちゲート広島
取締役会長

ニューヨーク到着の翌9月20日、我々は1930年代のロックフェラー・センター以来最大の民間プロジェクトとして同社が参画し、2019年第1期エリアがオープンした「ハドソンヤード」を視察した。

【ハドソンヤードについて】

- (1) 2012年にプロジェクトスタート。
- (2) 敷地面積は11haで、マンハッタンにおけるオフィスの中心地であるミッドタウン地区とミレニウム世代が好むチェルシー地区それぞれに近接する好立地にある。
- (3) 総事業費は250億ドル(約3.5兆円)でアメリカ最大の民間企業による不動産関連事業となっている。
- (4) 全体計画の約半分を占める第1期エリアは、4つのオフィスビル、ホテル、ショッピングモール、アートセンターなどから成る。
- (5) 4つのオフィスビルのうち「55ハドソンヤード」と「50ハドソンヤード」が三井不動産アメリカの物件となる。
- (6) コロナ禍を経て従業員が足を運びたくなるオフィス、またコラボレーションを通じて生産性向上やイノベーションを促進するオフィスとして評価されている。
- (7) マンハッタンでは稀有な新築かつ職・住・遊・食を備えたミクストユース型の開発となっておりMeta、CNNなど全米有力企業のニーズを多数捉えている。

【ハドソンヤードとハイライン】

ハドソンヤードは地下鉄の終点駅が直結しているが、同様に人流アクセスを担う「ハイライン」が整備されている。この「ハイライン」は廃線となっていた高架貨物鉄道跡を利用した2.3kmの空中庭園遊歩道でハドソンヤードはその終点になっている。我々もこの一部を散策したが、観光客や市民のアクセスだけでなく、ジョギングや憩いを求める市民のための空中遊歩道として賑わっていた。終点のハドソンヤードエリア内ではこのハイラインが新たに延長整備されて多くの人を呼び込む導線となっていることは大変興味深かった。

このように産業遺産ともいえる高架貨物鉄道跡を自然と融合したスペースに進化させ、大きな開発の中に取り込んでいることはこれからの都市開発の在り方にも大いに参考になると感じた。



【その他Q&Aから】

Q：ニューヨークでの建築費、土地の価格は上がっている？

A：アメリカでも上昇傾向は同じ。特に人件費が高騰している。マンション価格は落ち着いているが工場建設などは各地で旺盛。アメリカでは下落想定のないマインドか。

Q：ハドソンヤード第2期以上の大型開発プロジェクトはあるか？

A：この規模の開発プロジェクトは最後か。建て替えなどのシングルプロジェクトはありそう。

Q：米国事業でやりやすい点、やりにくい点は？

A：やりやすい点は、多少のロスはインフレが解消してくれるというマインド。やりにくい点は、日本では金融機関との関係がタンドেমだが、こちらの金融機関はドライ。一など、なるほどと思わせる点が多々あった有意義な視察だった。



◆【講演】共同通信社(ワシントン支局) 1

荒田 秀和
広島ガス㈱
常務執行役員

9月20日（現地時間）、共同通信社ワシントン支局の武井徹様より、11月に迫る大統領選の行方や、2009年から記者として見てきた15年間のアメリカの雰囲気の移り変わり、政治状況の変遷についてご講演をいただいた。

武井様は、日本でも注目を集めた2009年のオバマ政権の誕生から2012年の再選まで、更にはオバマ政権からトランプ政権への政権交代を通じてアメリカ社会が変容した重要な時期を取材されてきた。そして2022年からは3度目のワシントン支局赴任を経て現在に至っている。

以下に、ご講演内容の要点を記載する。（なお、本内容は9月20日（現地時間）の講演を纏めたものであり、その後の大統領選に関する動向は考慮していない。）



1. 2009年オバマ政権誕生から2012年の再選まで

・オバマ政権が誕生した当時は、リーマン・ショックを起因とした金融危機が米国社会に大きな爪痕を残していた時期であり、アメリカ国民だけでなく世界中の期待を背負って登場したオバマ大統領だった。「Yes We Can」というフレーズが「新しい希望」と「変革」の印象を強く与えたことや、黒人初の大統領であることから、アメリカには独特の高揚感が漂っていた。ブッシュ大統領の時代が終わり、新しい時代への期待感で満ち溢れ、社会全体に高揚した空気が漂い人々の興奮を肌で感じることができた。国民の表情にも明るさが感じられる時代だった。

・日本では、「核なき世界の機運を盛り上げ、歴史的な偉業を成し遂げた大統領」、「ノーベル平和賞を受賞した大統領」、「現職として初めて広島訪問を実現した大統領」などとして、オバマ大統領は好意的に見られ、人気も高い。

・一方、当初の期待とは裏腹にアメリカ人の見方は厳しい。オバマ政権は確かに変革をもたらしたかも知れないが、それが悪い方向へ向かってしまったというネガティブな意見も多く存在する。そのため、日本で報じられているオバマ政権のイメージとアメリカ国民の感情とのギャップを感じながら取材をしていた。オバマ政権発足後、大統領が約束した「変革」は次第に色褪せていった。幼い子供を抱えた母親が解雇され苦しんでいる姿や、就職先が見つからない若者達、社会に居場所がな

いアフガン・イラクからの帰還兵達の途方に暮れた声を幾つも聴いた。ワシントンの街にもホームレスが増えていったことを覚えている。次第にオバマ大統領の演説では、「変革は一夜で起きるものではない」という発言が増えていった。もともとオバマ大統領はオーラのある人物だが、日に日に白髪が増え元気をなくしていると感じたのは、2012年の大統領再選を目指した時の印象だった。

・2009年にオバマ政権が誕生した時期からアメリカ社会の分断が顕在化し加速していったと感じる。特に2010年頃から強硬な保守派であるティーパーティー勢力が現れ、景気刺激策や医療保険制度（オバマケア）など、オバマ政権の「大きな政府」路線に猛反発する運動が始まった。この運動は「小さな政府」を推進し、政府に過剰な権限を与えるべきではないという人々の草の根の運動であり、2010年の中間選挙では共和党保守強硬派が躍進する原動力となった。メンバーは白人が中心で、ソーシャルメディアを駆使してオバマ政権の変革に失望した人々の不満を吸い上げながら勢力を拡大していった。次第に彼らの共和党への影響力が増し（共和党員の71%が支持）、共和党も強硬姿勢に引っ張られていった。一方、民主党やオバマ政権は共和党を極端な右派と呼び、対立が更なる対立を生み、現在に続く党派分断の素地となった。

<では、なぜ今、アメリカ国民は互いにいがみあっているのか？>

・背景には、かつてアメリカの繁栄を支えていた白人の間で充満する「怒り」というキーワードが欠かせない。人種、思想・信条の分断の極まり、経済格差も広がる中、多くの人がささくれ立っているように感じる。米国の経済力、技術力、軍事力は依然として世界トップクラスであり、国力という意味では衰退していないが、かつての1960年代から1980年代に見られた懐の深いアメリカや、その寛容さは衰えを感じさせる。

・現在のアメリカ社会は異常な格差社会に直面している。富の偏在がより顕著化するなかで、中間層や学費の借金を抱えた若者達は、未来に不安を抱えながら日々の生活に悪戦苦闘している。親の世代より良い生活を手に入れるというアメリカンドリームは既に失われていると言われている。

・かつてアメリカの繁栄を支えた白人労働者は、このような怒りをため込んでおり、既存政党に見捨てられたという感情や政治不信、被害者意識がどんどん積み増している状況の中で、多くの不法移民が流入し、自分達の仕事が奪われていると感じている。

・白人の割合が減少しているという社会構造の変化も重要な要素である。現在、人口比で7割弱が白人であるが、近い将来には半数を割り込み少数派に転じることが避けられないと言われている。マイノリティーへと変革する白人層の焦りや不安が今のアメリカ社会に蔓延している。

これらの背景を意識してアメリカ社会を見ると、様々な状況がつながって見えてくる。

2. 2015年オバマ政権末期、2016年大統領選

・オバマ政権8年間の末期、女性初の大統領を目指すヒラリー・クリントン氏に対抗馬として名乗りを上げたのがトランプ氏である。当時、トランプ氏の言動に戸惑いを感じたが、それが政治に憤りを抱く大衆の心を驚掴みにした。政治経験が無いことを武器に、共和党の予備選で16人のライバルを退け、これまでの常識を覆して最終的にホワイトハウス入りを果たした。

<なぜ、トランプ氏は人気があるのだろうか。>

・オバマ政権の8年間は、政治的正しさ（ポリコレ）が重視され理想主義を掲げた政権だったため、それが息苦しく窮屈に感じていた人も多くいた。だからこそ、多くの国民はトランプ氏の歯に衣着せぬ物言いを新鮮に感じ、彼の本音を語るストレート・トークに魅力を感じた。「自分達が思ってい

ることを代弁してくれている」と考える人も少なくない。

・2016年、トランプ氏の副大統領候補の一人とされたベン・カーソン氏を取材した際、トランプ氏の素顔について尋ねたことがある。トランプ氏は高慢で差別的だと批判されるが、素顔は違うと指摘し「実際は知的で米国への深い思いがある」と語っていた。

3. 2024年大統領選の行方

・大統領選は、全米50州と首都ワシントンに割り当てられた計538人の選挙人の過半数となる270人の獲得を競う間接選挙である。2024年の激戦州は、7州（ネバダ州、アリゾナ州、ウィスコンシン州、ミシガン州、ノースカロライナ州、ジョージア州、ペンシルベニア州）である。この中でも選挙人が最も多いペンシルベニア州（選挙人19人）を取らないと厳しい戦いとなる。

・9月10日に行われた大統領選候補討論会では、トランプ氏とハリス副大統領の初の直接対決が実現した。CNNテレビの緊急世論調査によると、ハリス氏が勝者と答えた人は63%、トランプ氏が勝者と答えた人は37%となり、ハリス氏は初舞台をそつなく乗り切ったと言えるが、今後ハリス氏が勢いづくのかということ、そうとは限らない。国民の関心が高い重要争点である『不法移民対策』『経済』『大統領の役割』では、トランプ氏の方が高評価を得ていた。両候補とも、この段階になると、これまでの互角の戦いから抜け出すために無党派層の取り込みを狙っている。

・Real Clear Politicsによる世論調査（9月17日現在）では、全米の支持率は民主党候補のハリス氏がトランプ氏を上回っているが、全米支持率と当選は必ずしも直結しない。トランプ氏登場前の大統領選では、全米支持率で優位だった候補者が当選していたため参考になっていたが、2016年と2020年の選挙では、トランプ氏の支持率が低めに見積もられ、世論調査の精度を疑問視する声もある。振り返ると、2016年は投票前日にはクリントン氏が3.2ポイントリードしていたが、実際の得票結果は2.1ポイントのリードに留まった。また、2020年ではバイデン氏が7.2ポイントリードしていたものの、最終的な得票率は4.5ポイントのリードだった。従って、7つの激戦州の支持率はハリス氏が0.1ポイント上回っているため、日本の報道ではハリスの快進撃という印象を受けるが、現時点で言えることは、この差は誤差の範囲内であり勝者を予想することは非常に困難ということである。敢えてどちらかを選ぶとすれば、トランプ氏の勝利ではないかと考えられる。ハリス氏が勝利するためには、過去のデータを考慮すると、スプレッドが開いている必要があり、5ポイント以上のリードを確保する必要がある。

・一方、Real Clear PoliticsによるBetting Average（9月19日現在）では、ハリス氏が6.3ポイントのリードを得ている。

以上、講演要旨として報告する。

◆【講演】共同通信社(ワシントン支局) 2

大塚 和永
三菱商事(株)中国支社
支社長

1. 総論

選挙は依然として激戦であり、いくつかの州におけるいくつかの郡の結果によって、その差 10 万票以下で決する可能性が高い。また投票日にどちらが勝っても、結果は法廷で争われる可能性が高いだろう。如何なる見解でも正当化する世論調査が無数にある。どちらか一方の勝利を推測するのではなく、ハリス政権とトランプ政権が誕生した場合に予測されることは、①下院選挙は大統領選の勝者が制する可能性が高く、一方の上院は共和党にひっくり返る可能性が高い。②最も可能性の高いシナリオは、共和党のトライフェクタ（ホワイトハウス・上院・下院すべてを制する）、或は、民主党政権と共和党上院（下院は民主党）であろう。

2. トランプ 2.0

トランプ 2.0 の力学を理解するには、彼の統治アプローチを支えるものを知る必要がある。言い換えれば、「何が彼を動かしているのかを理解しなければならない」ということ。

彼の最大の関心事は経済である。第一次政権でも外国政権への対応を戦略化するとき、彼はまず徹底的な経済影響分析を求めた。第二の関心事は株式市場。つまり、彼は自分の政権のすべ



での決定がダウ・ジョーンズにどのような影響を与えるかを理解したいと思っている。トランプ氏が見ているこれらの 2 つのレンズを合わせると、ウクライナ戦争、中東紛争、気候・エネルギー政策、AI と量子コンピューティングの覇権争いの激化に対する彼のアプローチを理解するのに役立つ。また、政治家であるトランプ氏は、自分の支持層を非常に重視している。クリントン政権時代に民主党が背を向けたと言っても過言ではない不満を持つ人々は、トランプ氏の真の支持者となっており、彼らの票がなければ、自分がホワイトハウスに復帰する可能性はないことをトランプ氏は知っている。

トランプ氏は「ワシントン DC の伝統的な考え方を考慮しておらず」、何十年にもわたって米国の政策立案者や同盟国に確実性を提供してきた規範やタブーを完全に無視している。したがって、トランプ氏の 2 回目の任期は、型破りで予測不可能で、時には衝撃的なアプローチという点で、1 回目と変わらないだろう。

3. ハリス 1.0

対照的に、ハリス 1.0 は、多くの人にとって、より予測可能で、おそらく安定した環境を提供するだろう。ハリス副大統領は過去 4～5 年間、スポットライトの近くにおいて、党全体からの紛れもない支持が証明しているように、間違いなくチームプレーヤーである。しかし、彼女の政策を理解することは出来ても、大統領職としての性質を完全に予測することは不可能だ。なぜなら、他の大統領と同様に、それは彼女が主要なポストに任命する人々に大きく依存するからである。ハリス氏率いるホワイトハウスは、基本的に現在のバイデン政権と同様の政策を継続するとされている。しかし、共和党が上院を制するという仮定が正しければ、ハリス氏は非常に厳しい政治環境に直面し、何かを成し遂げることは非常に困難になるだろう。主要な政府任命ポジションへの指名を始めとして、上院を共和党が握っている状態では指名プロセス自体が遅延すると見られ、終わりのない債務上限に関する議論や、気候変動、ウクライナなどの主要政策分野でも苦勞するであろう。

4. まとめ

予測不可能な大統領になろうと、政治的に困難な大統領になろうと、米国は生き残り、結果として強くなり続けるだろう。中国を「封じ込める」ことを目的とした政策と、いかなる犠牲を払っても米国の雇用を守ることに焦点を当てた政策は、超党派的であり続けるだろう。いずれにしても、トランプ氏が経済と株式市場に焦点を当て、ハリス氏が勤労者世帯に焦点を当てていることを考えると、これら 2 つの政策背景は、今後の貿易・経済政策を予測する上で有用な背景となるだろう。

◆【視 察】Dassai Blue Sake Brewery

岩橋 浩二
三井不動産㈱中国支店
副支店長

ニューヨーク州ハイパークにある「DASSAI BLUE SAKE BREWERY」。マンハッタンから車で2時間ほどの自然豊かな場所に立地する。

ニューヨーク進出のきっかけはCIAという料理学校からの酒蔵を建設して欲しいという依頼だったという。CIAの日本食カリキュラムを充実させたい意向と、瀬祭側の日本酒の国際化のためには海外で生産をしないとという思いが結実した形である。

スーパーマーケットをリノベーションした工場の外観は日本的な庇状の屋根デザインと軒の深い縁側空間を設けている。ゲストを迎え入れる日本らしい縁側デザインが印象的だ。

2016年に始まった計画はパンデミックの影響でのスケジュールの遅延、コストアップを乗り越えて2023年9月23日に開業した。日本でつくられるオリジナルの「瀬祭」を超えるものを目指すという想いから、NYでの新ブランドは「DASSAI BLUE」と名付け、純米大吟醸の高品質・ハイエンドな日本酒製造に特化している。



2024年6月から本格的に稼働し、現在（9月時点）は日本人スタッフ4人、ローカルスタッフ7人合計11人のスタッフで1週間に1タンク（720m16,000本相当）を製造している。将来的には3～4倍の生産量に上げていく目標とのことであった。

アメリカのアルコール飲料全体に占める日本酒の割合は現状0.2%という低い水準にとどまっている。温度管理（4～5度）が必要でスーパーでは管理できない温度帯のため販売できず日本食レストランが主な供給先であるため、普及していくには10年以上かかると霜鳥社長は語るが、可能性を見出している。

日本から仕入れた山田錦を23%、50%まで精米した純米大吟醸23、50とアメリカ産山田錦を35%まで精米した純米大吟醸35の3種類で商品展開し、現地向けにアルコール度数も14%と2%下げた商品にしている。

当工場ですべての行程（精米→洗米→蒸米→麴→醪→発酵→上槽→濾過（火入れ））をデータ管理しながら製造しているが、気候や水も異なるため、日本から米を持って行っても味は日本とは同じものにはならないそうだ。そのため杜氏を置かないスタイルはそのままに、手作業でデータを記録して共有・確認しながら、スタッフ皆で議論し試行錯誤しながら品質向上に努めている。（Tomiya氏談）

日本のものと同じものを作ることを目的にしていなかったが、試飲をしてみると確かに日本製のものよりも香りが高く、アルコール度数が低い分のみやすい印象であった。特に、アメリカ製山田錦でつくった瀬祭35は他のものより香りが芳醇な印象だった。こちらの工場には週に100～150名が見学を訪れるそうだ。我々の視察時にも何名か見学者が来場していた。

世界の中心であるニューヨークから日本酒文化を発信していくという挑戦、意欲を体感できる視察となった

◆【所 感】ジャズクラブ・バードランド

吉田 豊
白井汽船(株)
代表取締役社長

ニューヨークのジャズクラブ・バードランドは、まさに「ジャズの聖地」として訪れる者を常に魅了してきた。ブロードウェイの劇場街に位置し、毎晩一流のアーティストたちが集うこの場所は、観光客から地元の音楽ファンまで、幅広い層に愛されている。そんな特別な場所で、特に心に残る夜のひとつが、大江千里によるライブショーだった。

19時の幕開けとともに、会場は静けさに包まれ、ピアノの前に座る大江千里の姿が浮かび上がった。彼が奏でる最初の一音が響くと、観客は瞬く間に彼の世界に引き込まれた。大江千里は、元々日本のポップス界で圧倒的な人気を誇っていたが、ジャズピアニストとしての新たなキャリアをニューヨークで築き上げ、その音楽には深い成熟が感じられる。ニューヨークという街での経験が、彼の音楽に豊かな深みと洗練をもたらしている。

この夜の演奏は、大江の音楽家としての成長と熟練を余すところなく披露するものだった。オリジナル楽曲「Boys Mature Slow」や「Answer July」は、彼の個性と人生の物語を反映し、聴衆に強い印象を残した。彼の音楽には、繊細さと大胆さが共存しており、日本的な美意識とニューヨークのジャズシーンで培われたリズムとハーモニーが絶妙に融合している。彼のキャリアを象徴するような、力強くも丁寧な演奏は、聴く者を感動させずにはいられない。



私自身、ニューヨークで多くのジャズピアニストの演奏を見てきたが、大江千里ほど聴衆を感情的に深く揺さぶるアーティストは稀だ。彼の演奏には、技術的な技巧だけでなく、人間としての温かさと知性が宿っている。これは、彼が積み重ねてきた人生経験が音楽に反映され、観客に直接語りかけるような力を持っているからだろう。

バードランドという会場もまた、特別な舞台。クラブの親しみやすい雰囲気と、ジャズの本場ならではのエネルギーに満ちた空間は、大江のようなアーティストにぴったりだ。ライブが終わる頃には、観客全員が彼の音楽に浸りきっており、惜しめない拍手と共にステージを後にした。その余韻に浸る観客たちの表情からも、この夜が特別な時間であったことが伺える。

ニューヨークで大江千里のショーを体験することは、単なるジャズのライブ以上の価値がある。それは、彼の人生と音楽が交差する瞬間を共有するという、他では味わえない特別な体験だ。私のように彼の長年のファンにとっては、彼の進化と成長をこの地で目の当たりにすることが、何よりも幸せな時間となる。この夜のステージは、まさにその証だった。

◆【市内視察】ウォール街、9.11 メモリアル

加藤 雅規
(株) 加藤組
取締役副社長

ニューヨーク視察の4日目、日曜日の午前中はマンハッタン島の南の端ダウタウンにあるウォール街から世界貿易センタービル跡地の視察を行なった。

ウォール街へ入る手前、ブロードウェイの起点付近にはチャージング・ブルと呼ばれる大きな牛のブロンズ像があり、ダイナミックな金融業界を象徴するパワースポットとして多くの観光客でにぎわっている。

ニューヨーク証券取引所のあるウォール街は、壁のあった通りとして知られており、アメリカ初代大統領ジョージ・ワシントンが就任演説を行ったフェデラルホールもこの通りに面している。



そのすぐ前の路面には「WALL STREET PALISADE(ウォール街の柵)」の石碑が埋められており、碑文には次のように書かれている。

「ウォールストリートの名前は、1653年から1669年までの間ニューアムステルダム(現在のマンハッタン)の北の境界に沿って丸太の防護壁が建てられていたことから名付けられた。」

この石碑の両側のコンクリートで埋められた所は、柱が立っていた跡とのこと。その柵は、ヨーロッパ人がマンハッタン島の南の港町へ最初の街を築いた際に北の原住民から街を防護していた。しかしその街も手狭となり1669年に壁を取り壊してからは、北部へ開発を進めていくこととなった。



ウォールストリートをトリニティ教会へ突き当たるとブロードウェイと交差する。ブロードウェイは、ヨーロッパ人が入植する以前に原住民によって開拓された道路で、マンハッタン島の南の端から北へ向けて約50kmの幹線道路として今でも使われている。

ニューヨーク市内は碁盤の目状に道路が整備されており、南北をアベニュー、東西をストリートと呼び、それぞれ番号が付けられている。街を斜めに通るブロードウェイとアベニューの交差点はスクウェアと呼ばれ、公園などの広場が設けられている。7thアベニューとブロードウェイの交差点がタイムズスクウェアである。ブロードウェイを残したことでニューヨークの

街は様々な表情を持つことになっている。

ブロードウェイから少し西へ歩くと、あのグラウンドゼロ、9.11 メモリアルプールへ出る。

ニューヨーク 9.11 メモリアルは、2001 年に起きた世界貿易センターでの同時多発テロの犠牲者を追悼する場所として 2011 年 9 月 11 日に開業している。

この少し手前に消防署があり、我々が到着するとすぐに消防車 2 台が出動していった。9.11 には 343 人の消防隊員が命を落としており、まさにこの消防署もと思うといたたまれない気持ちになる。



9 月 11 日ボストンを燃料満載で飛び立った 2 機の旅客機は、ほぼ同時にハイジャックされ実行犯の操縦によりニューヨーク・マンハッタンへ向かった。

1 機目が朝の 8 : 46 にワールドトレードセンター北棟へ突入し爆発炎上した。2 機目は 9 : 03 にツインタワー南棟へ突入し爆発炎上した。

南棟では、北棟の爆発を受けて多くの人が避難を開始していたため、人的被害は北棟よりも少ないが、先に突入を受けた北棟よりも早く南棟が崩壊している。このテロにより 3, 000 人近い犠牲者が出ている。

メモリアルプールの周りには、犠牲になられた方の名前が刻まれており、日本人 24 人の名前も見て取れる。犠牲者の名前の所に白いバラが供えられているのは、その人の誕生日を表しているそうだ。

グラウンドゼロの再建においては、現在のワンワールドトレードセンターが建設され、ニューヨークで最も高いビルとなっている。



ここからは、ニューヨークでの体験と感想について書きたいと思う。

まず、時差については、羽田を午前 11 : 00 に出発して同じ日の同じ時間に到着するため本来なら寝る時間からの視察となるので、とても眠く頭がぼーっとしている。3 日目の朝までとても早く目が覚める。4 日目にやっと朝までぐっすり寝ることができた。

早く目覚めた朝は散歩をする。ホテルから西へ 20 分も歩くとハドソン川に出る。ニュージャージー州からの通勤客を乗せた船が行きかっている。そこから東へ 50 分程歩くと 5 番街のロックフェラーセンターへ着く。

街を歩くと外壁に非常階段のあるとても古いビルが多いことに気付く。1800 年代には街の原形ができていたというから驚きである。

もう一つの驚きは物価の高さだ。水 500ml 1 ボトルが 6 ドル、ラーメンは 20 ドル、そして市営住

宅の家賃が毎月 40 万～60 万円、ドジャーススタジアムの前の方の席は 1000 ドルで普通の人が購入し、年収 800 万円は低所得層とのこと。

アメリカの人口は今でも移民により増加中で、GDP もそれに応じて伸びている。米国民の意識は毎年 2～4 % 経済が成長すると考える人が多く、個人消費額も非常に多いのが特徴とのこと。今後大きな成長は見込めないと考える人の多い日本との違いである。

最終日の火曜日、JFK 空港に向かう途中で 125th ストリートを通過した。

実は日曜日の朝、地下鉄に乗ってセントラルパークへ行くつもりでいたが、間違えて特急に乗ってしまい、セントラルパークの北のハーレム (Harlem) エリアの 125th Street 駅まで来てしまっていたのだ。ここはアフリカ系アメリカ人の文化とビジネスの中心地となっているが、かつてはオランダ系移民の住居地だった。ちなみにハーレムと言ってもトルコ語の harem とは全く関係ない。日曜の朝は教会へ礼拝する人が多いためか、町は閑散としてとても静かなところだった。116th Street 駅までの散歩中に偶然、奴隷解放運動家ハリエット・タブマンの銅像を見つけ、何とも言えない力強さを感じ、アメリカ経済発展の陰にある歴史の一端に思いをはせた。

今回の視察では、ニューヨークの経済や大統領選の考え方に直接触れることが大きな目的だったが、視察先の皆さんや現地で案内していただいた高田さんの熱心な説明のおかげで、移民労働者と経済成長と物価高騰について学び、体験することができた。この視察研修を企画・案内していただいた皆様にお礼申し上げまして報告とさせていただきます。

◆【市内視察】ニューヨークリバークルーズ、エンパイア・ステート・ビル

細田 宗嗣
細田林業(株)
取締役

高木 潤
(株)中国新聞社
記者

自由の女神像とエンパイア・ステートビル。9月22日、米国の精神と富を象徴する建物を体感した。

この日は快晴。リバークルーズの出発地はウエストサイド・マンハッタンのハドソン川沿いの船着き場。遊覧船に乗り込み、隣を眺めると巨大な空母が泊まっていた。第2次世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争に従事した空母「イントレピッド」を博物館として活用している。

甲板には戦闘機が並び、スペースシャトル「エンタープライズ」も収容しているという。艦上には観光客の姿が目立ち、人気うかがえる。博物館は20世紀に軍事と宇宙開発で先頭に立った歴史を誇っているようだ。施設の目的は異なるが、呉市の大和ミュージアムを連想させる。産業史の一部という視点であれば、相通じる面もある。



ハドソンヤードの高層ビル、ウォール街の筋、商業用に改装した赤い倉庫…。マンハッタン島を歩き、仰ぎ見てきたスポットを次々と巡る。エリアごとに個性の異なる建物が重なり合うように立ち、変化を生む。ニューヨークは「人種のモザイク」と呼ばれるが、建物もモザイクのよう。古びた中層の公営住宅も見えた。住む人の格差も映し出す。

リバティ島の自由の女神像に近づくと、視察団のメンバーは船内の客席からおもむろに立ち、ス

スマートフォンのカメラを向けた。

女神像は1886年、フランスが米国の独立100周年を記念して寄贈。台座部分の建設資金は新聞社の社主ピューリツァーが募った。寄付した人の名前を紙面に載せるという手法で呼びかけた。民主主義を支えるジャーナリズムの賞に名を残すピューリツァー。逸話をガイドから聞き、経営者としての志の高さと巧みさを知った。

女神像はマンハッタン島から大西洋を望む方角に立つ。かつて灯台として使われた。大西洋から米国に入る移民を導き、迎える市民に建国の精神をともし。両者を対置する境界に象徴の像を設ける感性。現代のまちづくりの視点から見ても優れている。ブルックリン橋周辺までマンハッタン島の外縁を巡り、1時間半で往復の船旅を終えた。



バスで移動。エンパイア・ステートビルのエレベーターに乗り込んだ。新型コロナウイルス禍を経てエレベーターの音声案内から日本語が消えていたが、復活したようだ。物価高などを背景に日本人の「内向き志向」も取り沙汰される。観光も含めて海外を訪れる日本人が減れば、ビジネスでの存在感が薄れかねない。

経由した80階は展示コーナー。「キングコング」など舞台となった映画を面白く紹介していた。ビルが完成した1931年当時に流行した建築様式「アール・デコ」の外観とは対照的。20世紀の資本主義の栄華を振り返りながら、現代的な娯楽を打ち出すセンスが光る。86階の展望台に着く。摩天楼の奥に女神像の輪郭がはっきりと見えた。

◆【講 演】三井住友銀行ニューヨーク支店（金融情勢関連） 1

荒谷 悦嗣

(株)荒谷建設コンサルタント

代表取締役

1. はじめに

三井住友銀行ニューヨーク支店（以下 SMBC/NY）は、マンハッタンを南北に縦断するパーク・アベニューを南から北に向かって進み、グランドセントラル駅とぶつかった所で左右に分かれた車線が再合流した少し北側、ミッドタウンの 277 Park Avenue ビルにオフィスを構えている。訪問当日は、その東端にある国際連合本部にて国連総会が開催されていたため、厳戒な警備体制が敷かれていたのが印象的だった。そのような中で SMBC/NY を訪問し、米国経済状況、日本経済、米国大統領選の行方についてレクチャーを受けた。その詳細は金築等氏のレポートをご参照いただくこととして、本稿では SMBC/NY にてご教授いただいた米国経済状況を元に、個人的に興味を持った事項を考察してみる。



2. 米国経済の動向について

米国経済は2008年のリーマン・ショックや昨年までのコロナ禍のようなショックはあったものの、そのたびに復活を遂げており、特にコロナ禍以降の米国経済は、政府とFEDの支援によって「傷跡」なく回復しているとのことである。図1に示すように過去30年ほどの実質GDPの推移を見ると、米国経済はショックのたびに立ち直って、マクロに見れば右肩上がりの経済成長を遂げている。それに対して、日本は人口減少とバブル崩壊以降の経済の停滞も相まって、実質GDPも停滞し、近年で見ればややシュリンク傾向にあるのとは対照的である。

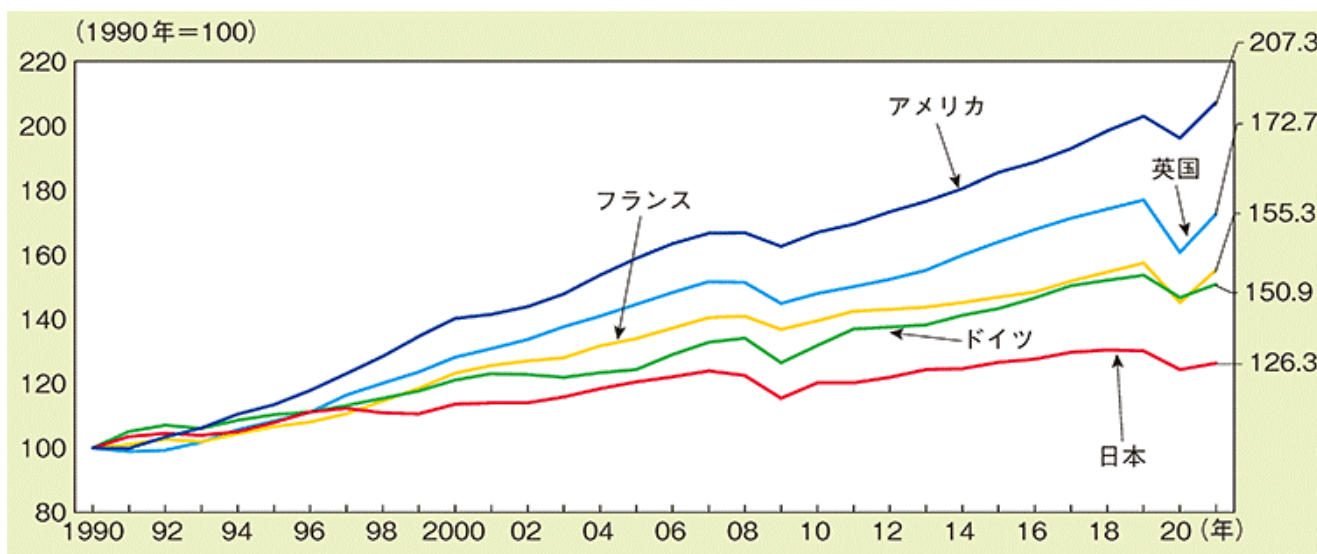


図 1 主要先進国の実質 GDP 推移（内閣府 Web サイトより）

米国の景気を支えている要因の1つは、GDPの約7割を占める粘り強い個人消費であることが特徴的である。コロナ禍の影響を直接的に受けた2020年からの数年も、個人消費に支えられてマイナスの幅を抑えているとのことで、2024年現在では個人消費の増加ペースがコロナ禍前の軌道に戻

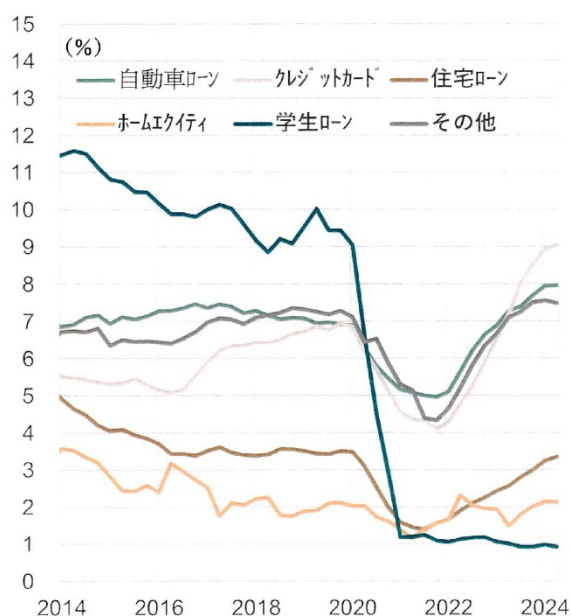


図2 家計債務の延滞率 (SMBC/NY 資料より)

が更なる負担となったとみられている。利上げに伴うローン金利の高止まりも相まって各種債務の延滞率も上昇し、インフレによる物価上昇とともに消費者の家計のバランスシートが悪化し、米国経済を支えてきた個人消費は楽観視できない状況にある。

こうした背景から、我々がニューヨークを訪問したタイミングで米国連邦準備制度理事会 (F R B) が 0.5% の政策金利の利下げを決定した。利下げに踏み切るのはコロナ禍以前の 4 年半ぶりであり、通常の利下げ幅の 0.25% を超える、大幅な利下げとなっている。

3. おわりに

今回の政策金利の引き下げを受け、バイデン大統領は「消費者にとって良いニュース」とした上で、インフレ率の低下から金利はさらに下がるという見通しを示している。一方、共和党のトランプ前大統領は F R B の積極的な利下げを批判し、大統領が金融政策に発言権を持つべきと主張している。利下げを受けて各種ローン金利の低下が見られるなど、早くも米国経済に大きな影響が出ている。米国経済が個人消費によって支えられているという側面からすれば、米国的な個人消費マインドで消費拡大による経済の下支えがなされそうだが、中長期的には大統領選挙の結果を含めて楽観視できない状況にあるといえよう。

っている。

米国の個人消費のベースには、現金があればすぐにモノを購入し、現金がなくても将来現金になる見込みがあればモノを購入するマインドがあり、日本とは現金に対する考え方がかけ離れている。日本は現金を元本が保証される銀行への預貯金に回す傾向があり、これは個人金融資産の内訳にも日米両国の大きな違いが見て取れる。

堅調な個人消費の背景にはコロナ禍期間の超過貯蓄があったが、この過剰貯蓄は既に消費されたものと考えられ、図2のようにローンやクレジットカード等の債務の延滞率は上昇してきている。特に学生ローンの支払延滞に関しては、物価高と金利高による家計の悪化が主な要因となり、コロナ禍の支援策として支払延期されてきた学生ローンの返済再開

◆【講 演】三井住友銀行ニューヨーク支店（金融情勢関連） 2

金築 等
中国電力㈱
執行役員

1. はじめに

米国の経済の中心であるニューヨークに拠点を置かれる三井住友銀行を訪問し、米国の経済、事業環境、これらに密接に関係する政治状況について、現状と今後の見通しをご教示いただいた。

訪問日は2024年9月23日で、FRB（米連邦準備理事会）が9月18日に4年半ぶりの政策金利の0.5%引下げを発表した直後で、当日は岸田首相が国連総会のためにニューヨークを訪れ、ブルームバーグ主催のイベントで資産運用会社と意見交換をするなど大きな動きのあるタイミングであった。また、11月5日投票の大統領選について、現地メディアで盛んに現況が報道されており、政治、経済ともに日々の動きをダイナミックに感じることができた。

2. 米国の政治経済状況（概観） ～歓迎挨拶から～

- ・昨日から国連総会で街中がざわついているが、季節的には今が一番過ごしやすい。
- ・日米の橋渡しを目指して取り組んでおり、日系企業の米国進出の支援が主な仕事。米国は日系3メガ銀行で、約100兆円（SMBCは約40兆円）の資産運用をしており、プレゼンスは大きい。昨年Retail部門を立上げ、デジタル技術を積極的に活用中。
- ・現状、日本からの投資は活発で、米国は中長期的に見ても魅力的な市場。今後も成長路線が続くと見ている。
- ・先週FRBが利下げし、長く戦ってきたインフレを沈静化し、リセッションにならないように注意が必要と思うが、個人的には楽観視している。金利が下がるので年末からは経済は活性化するだろう。
- ・大統領選は接戦。社会分断が不安要素と考えている。

3. 金融市場・経済の見通し

- ・先週FRBが0.5%利下げしたが、年内にもう2回、計0.5%の利下げをすると見ている。来年は四半期ごとに0.25%下げて、最終的には3.50～3.75%のレンジを予想するが、利下げは2025年末で打ち止めと見ている。ただ、もしトランプが大統領になった場合、一律10%の関税付加で物価上昇につながる可能性もあるので見通しにくい。
- ・日銀は利上げを継続すると予想されるので、為替レートは徐々に円高になるが、それほど急激ではないと思う。2025年末で128～142ドル/円レンジと予想。
- ・米国経済は、コロナ禍以降2021年末～2022年初に一時的に成長率がマイナスになったが、その時期以外は2%を超える高い成長率を維持。
- ・足元も個人消費主導で堅調に推移しており、コロナ禍以前の軌道に戻っている。ただ、消費者の経済状況評価は高いが、労働市場に対する評価が低下しており、少しケアが必要。
- ・日銀は物価安定だけを見ているが、FRBはデュアルマンドレートと言って、物価安定と雇用安定

の両方を見ている。パウエル議長は、足元の労働市場の緩みに警戒と言っており、現状をキープしたい意向がうかがえる。

- ・堅調な消費の背景として指摘される超過貯蓄は既に費消されたと見える。そうすると、ローン頼りになるが、債務の延滞率が上昇（低所得者層に多い）してきており、家計を取り巻く環境は悪化している。ただ、急激に崩れる状況には見えない。米国の消費者は、将来お金をもらえるだろうとの前提で先にモノを買う傾向が強い。

- ・製造業の在庫調整局面は 2023 年で終了。サービス業が本格的に悪化しなければリセッションにまで至らないだろう。中小企業の景況感は急激に改善している。

- ・雇用者数の増加ペースは平時並みに戻る一方、失業率は徐々に上昇しており、FRB が利下げをする論拠はそろっている。

- ・政府の予想では、2022～2025 年にかけて前年比+1%の人口増加を見込む。そのほとんどは移民流入。モノを作るにはヒトが必要だが、コンストラクションワーカー不足を移民が補い、経済を支える構造。

- ・日本に目を向けると、日銀は利上げ方向ではあるが、日銀のバランスシートを見ると、国債 590 兆円（平均利回り 0.289%）、預金が 599 兆円（超過準備預金 484 兆円に対する利息 0.1%）。日銀は、2023 年末は 2.3 兆円の黒字だが、政策金利が上がると、日銀から市中銀行への利息支払いが大きくなり赤字に転落することになるので、急激に利上げはできないのではないかと予想。当面は、国債と預金の両方を減らしながらの調整が進むのではないかと予想。

- ・過去の日米の金利差による為替への影響を統計的に見てみると、130 台半ばから 140 円前半のレンジになり、現状の為替レートはその範囲内。

4. 大統領選挙の見方

- ・全米平均支持率では、ハリスが急伸しているが、まだ接戦の範囲内。投票率は共和党支持者の方が高い傾向にあるので、ハリスはスプレッドがある程度開いていないと勝てない（前回選挙時は 7.2% ポイント差があった）。大都市圏に住む民主党支持者は、選挙に行かない人が多いのがその背景。日本の報道ではハリス有利としているが、現時点で言えるのは接戦であるということ。

- ・選挙の勝敗は激戦州 7 州（アリゾナ州、ネバダ州、ミシガン州、ペンシルバニア州、ウィスコンシン州、ノースカロライナ州、ジョージア州）の結果次第。何か大きな出来事があったら、どちらかに転ぶ構造。

5. まとめ

現地で日々情報を収集されている同行の視点での政治経済に関する講義は興味深く、現地の生の情報を基にした分析の重要さを痛感した。

また、今回の視察で大統領選の仕組みや現地駐在の方々の見方などを知った上での大統領選挙戦はとても興味深い。両者には経済政策や環境政策などに違いがあり、米国での事業環境を大きく左右することになるため、しっかりとウォッチしていきたい。果たして、どちらに軍配が上がるのか。

◆【雑 感】ニューヨークあれこれ 1

堂本 高義
堂本食品(株)
代表取締役社長

50年ぶりのニューヨークである。羽田空港から直行便で13時間。隣の方とお話したり、映画を3本見たり、寝たりで意外と遠くは感じなかった。

ホテルに到着して少し散策すると人種の多様さ、物乞いの存在、太った人の多さが印象的であった。コンビニに入ると価格が日本に比較して3倍くらい高い！ ペットボトルの水が3ドルとか。円安（1ドル150円前後）とインフレのすさまじさを感じた。

《トレーダージョーズについて》

ニューヨークのダウタウン店を訪問。トレーダージョーズは、スーパーマーケットである。全米570店舗、年商133億ドル。ダウタウンに位置し、地下1階と2階を売り場になっている。食品がほとんどで一部花売り場がある。

平日の14時ころだが、お客が大変多い。レジ待ちが100人くらいずらーと並ぶ。レジが34台あり、一人ずつ担当を配置。案内人がいてレジ係が番号を上げてそこに案内。すばらしい人力での処理能力の高さである。



地下2階から1階、地下1階から1階へカート専用のエスカレーターがあり便利。駐車場はなく、買い物物は各自のキャリーバッグで。

商品はPBが95%だそう。量をさばく売り方で、弊社もなにか作っても面白そうである。

《その他驚いたこと、感想》

1) 数十台のダンプカーの駐車列

訪問時に国連の総会があり、国連に向かう道に大型ダンプカーが数十台駐車していた。不審者の車での突入を防ぐためだそう。やるのが凄い！

2) 五番街のティファニー

おのぼりさんよろしく映画「ティファニーで朝食を！」のお店の中を見学。陳列された商品はとても高そうで尻込みした。帰りの飛行機のなかで早速、映画の「ティファニーで朝食を！」を観た。オーディリー・ヘップバーンがなかなか良かった！



3) トランプタワー

あのトランプさんのビルである。45代大統領の旗などかざってあった。ショップでトランプさんのお顔入りのゴルフボールを買った。ひっぱたいていいのだろうか？

4) Sleep No More

ニューヨークでの観劇ということで「Sleep No More」を観た。いや、体験した。予備知識もなく仮面を被り、スマホは袋にロックして使えない状態で、真っ暗な廊下を歩いて入るという、とてもスリリングな入り方であった。

何か目の前で俳優の人がなにか演じているのだが、なにをしているかよくわからない。俳優や人の後を追いかけるという観劇？であった。結局、何もわからないまま、終了。後でシェイクスピアのマクベスをベースにした劇と知ってネットで調べた。遅すぎた。

5) A5サイズが違う

現地でもらったパンフレットと日本から持って行ったパンフレットのサイズが少し違った。びっくり！

6) 帰国時の飛行機便について

40分の出発遅れが発生。理由はクルーの車が渋滞で遅れたとのこと。フーム。事故なら仕方ないが、渋滞で？ そのため羽田空港での広島への乗り継ぎは、ギリギリ。日本航空さんの社員さんのお陰がなければ、あるいは個人だったら乗れなかっただろう。ありがとうございました。

以上雑感でした。



◆【雑 感】ニューヨークあれこれ 2

中谷 圭吾
広島信用金庫
副部長

7 日間に亘る行程の 5 日目の午後、企業視察としていくつかのジャンルの小売店を巡った。高級デパート「バーグドルフ グッドマン (Bergdorf Goodman)」とスーパーマーケットチェーン「トレーダー・ジョーズ (Trader Joe's)」、そして日本発の世界企業、我々が「ユニクロ (UNIQLO)」である。

最初に立ち寄った「バーグドルフ グッドマン」は、高級デパートということもあって重厚な雰囲気だが、平日の月曜日の午後ということもあってか、来店客はまばらであった。場違いな私はおろおろしながら値札をめくる。ネクタイやシャツ、サングラスなど、いずれも \$ 400 (約 58,000 円：帰国した 9 月 25 日のドル円相場での概算、以下同じ) を下る商品は置かれていなかった。私が知らないだけだとは思いますが、あまり聞いたことのないようなブランドのシックなメンズジャケットが \$ 5500 (約 80 万円) であった。いかにも「セントラルパーク観光のついでに寄りました」感が満載の私には、店員が誰一人声を掛けてこなかったのが印象的であった。

その後立ち寄った「ユニクロ」は、「バーグドルフ グッドマン」からもほど近い、5th アベニューに面した大型店であった。馴染みの商品が並び、陳列方法も日本と大差ないように感じられ、少し落ち着きを取り戻した。来店客も多く、平日とは思えないほどの盛況振りに、広島にもゆかりのある店がニューヨークでも支持を集めていることを誇りに感じた。早速、気になる「お値段」を確認してみたのだが、何となく高い！ エアリズムやヒートテックの T シャツからスウェットの上着、カシミヤのセーター、コーデュロイのパンツ、コートなどの主要商品の POP をいくつか写真に収め、帰国してからサンモールのユニクロへ行ってみた。



POP を頼りに同一商品を探して金額を確認していく。メンズとレディース、あわせて 8 つの商品を比較することができたが、価格差が小さいものでも 1.5 倍、大きいもので 2.9 倍、平均でも 2 倍超の価格差がわかった。

最後に「ユニクロ」からバスで移動し、「トレーダー・ジョーズ」のブロードウェイ & 72 丁目店を訪れた。来店客がとにかく多く、大きなカートで食材をまとめ

買いしている人が多い印象を持った。現地ガイドの高田さんおススメの小袋チョコレートが \$ 1.19 (約 170 円)、ナッツの大袋が \$ 4.99 (約 720 円) と、ここだけ違う国かと感じるくらい安い！！ 品定めしていると、

最後に「ユニクロ」からバスで移動し、「トレーダー・ジョーズ」のブロードウェイ & 72 丁目店を訪れた。来店客がとにかく多く、大きなカートで食材をまとめ買いしている人が多い印象を持った。現地ガイドの高田さんおススメの小袋チョコレートが \$ 1.19 (約 170 円)、ナッツの大袋が \$ 4.99 (約 720 円) と、ここだけ違う国かと感じるくらい安い！！ 品定めしていると、



周りの大半の商品に「トレーダー・ジョーズ」のロゴが入っていることに気付く。「流通視察ドットコム」というサイトの情報によると、自社開発のプライベートブランドが全商品の約 90%を占める独自戦略で人気のスーパーチェーンであるとのことだ。

二列に並んだレジ待ちの行列は先頭が見えないほど長く、集合時間までに購入できるのかと不安になったが、行列の先には 30 台近くものレジがフル稼働で待ち受けており、案外すんなりと清算が済んだ。手慣れたオペレーションは人気店の証なのかもと感じた。ちなみにデザインに惹かれて購入したトートバックは \$ 3.99 (約 580 円) と激安ながら、日本でも人気があるようで、アマゾンジャパンでは、逆に現地より割高の 2 千円で販売されていた。



出国前、マスコミ報道やインターネット情報により、両国の「物価水準の違い」については、「為替の影響」もあって、相当なものなのだろうと覚悟して挑んだが、私のささやかな想定をはるかに上回る「格差」には本当に言葉を失った。大変貴重な体験をありがとうございました。

◆【雑 感】 ニューヨークあれこれ 3

高原 哲也
丸紅(株)中国支社
支社長

9月の国連総会開催の時期に、世界の中心ともいえるべきニューヨークに行く機会に恵まれた。在NYの日系企業駐在員の方々、並びに丸紅アメリカ社長と面談しマンハッタン内に居住する方々の生活など聞く機会があったので、以下報告する。

＜社会構成：移民問題、街並み＞

元々移民の集合体でもある合衆国においては他国とは異なる視点になるものの、「不法移民問題」については大統領選挙の争点の一つにもなっている。現在ベネズエラを中心とした不法移民がテキサス州に流入しており、共和党基盤のテキサス州→民主党基盤の州（NY州 etc.）にバスで片っ端から移送している、と。

マンハッタン内の割と高級ホテルが移民の収容場所になっており、NYに移送された不法移民は、そういったホテルに収容され数百ドル/日の生活費を受給している状況だとか。ただ、受け入れ側の州も全面拒否しているわけではなく、都市機能維持の為には一定数の低賃金・単純労働者が必要であり、一定数の移民は送還せずに引き続き住まわせて低賃金・単純労働者になってもらうという、奇妙な需要と供給がマッチした状態になっている模様。

空中庭園があるハイラインは今回の視察場所であり土日は観光客で溢れかえっていたが、2000年代後半にハイライン建設までは周辺エリアは映画「ロッキー」の舞台のようなアウトローが集まる街であり、典型的な街そのもののリフォーム事例であろうと思う。

（ロッキーの舞台はフィラデルフィアだが、主人公がランニングしながら食肉にパンチするシーンの町並みはハイライン建設前の当該地区そのものの風景だとか）

＜マンハッタンに住む人、仕事する人＞

専門的な知識を持つ職種（会計士など）は、日系企業のManaging Directorクラスの人件費を約5年で抜くほどの人件費レベルであり、マンハッタン内と他のアメリカ地区での生活コスト、様式の格差は、日本の東京と地方とは比べ物にならないレベルとのことだった。非常に大きな地域格差がアメリカという1つの国の中で成立しているのを見ると、日本でも東京と地方の格差＝東京一極集中は（歪みがありながらも）更に続くのでは、と思った。

事業活動という観点では、アメリカは基本的に成長している国であり、企業で事業計画を立てる際も「経済成長すること」を前提で立案するので、いい意味でいい加減。自社の計画そのものが未達でも、社会全体が成長拡大しているので未達分が吸収されやすい。一方で、日系企業では社会全体の成長は加味しないのでより計画立案にはシビアになり、日本の本社側で厳しい査定を受けることになり、日系企業の米国法人は板挟みに悩むことが多い、と。

雇用に関してはマンハッタンの中は基本的に雇用流動性は高いものの、日系企業は「（多少報酬は安くとも）長く安心して勤めたい」という層のアメリカ人のニーズを汲み取って雇用しており、比較的人材確保には苦労はしていない、と。

今回の視察テーマである大統領選挙については、社内でどちらの政党を支持するか、という話はオフィスで普通にする（初見の人に政治的な話をするのはタブー）と。「agree to disagree（相手とは主義思想が異なることに合意する）」の文化が浸透しているアメリカでは、違う政党の支持者であっても仲たがいすることはない、と聞いたことが今回の視察で一番印象に残った。一方で、個人レベルでは「agree to disagree」文化が浸透しているのに、国家レベルになるとどうして特定の他地域に不寛容になるのか…。

最後に、今回の視察においては企画メンバーとして視察先アレンジ等を行ったが、なかなか至らぬところもあった。来年も引き続き広島にいれば、よりよい企画立案致したい。

◆【雑 感】ニューヨークあれこれ 4

野口 隆志
(株)ノサックス
専務取締役

長いようで短かったニューヨークでの 1 週間。お土産でばんばんのスーツケースを開いて、荷物と思い出の整理をしながら、傍らでパソコンに向かいこの原稿を書き始めている。

この 1 週間、どこに行っても、どこを歩いても、底知れない人間の持つ熱量を感じて眩暈がするようだった。近代文明と資本主義経済そして世界中の人々の情念が交錯する、いわばニューヨークというサウナに入り浸っていたような、そんな心地よい火照りと疲れを感じる時間であった。考えてみれば、国それ自体の歴史こそ浅いものの、二百数十年という短い時間で、人類史上他に例を見ない圧倒的な経済的力と人類を月に送るまでの科学技術を手に入れたこの国。その力の源であり、世界の文化経済の中心であるニューヨークの街の印象は、私が想像してきたイメージよりもはるかに強く、大きなものであった。

毎年恒例のミッションとなってきた視察スケジュール外の有志による個人的経済視察は今回も行われ、タイムズスクエアを始めとし、5th アベニュー、トランプタワーなど、さまざまな場所を訪れ、現地の人たちと会話し、多くの見聞を広めることができた。なによりニューヨークの街並みは、いたるところアメリカ映画で見た風景そのものであった。特に感動したのはタイムズスクエア周辺を歩いていたとき、前触れもなく RADIO CITY MUSIC HALL の看板が目飛び込んできたときだった。ここは映画「ゴッドファーザー」の劇中でアル・パチーノ演じるマイケル・コルレオーネが恋人とのデート中、父ドン・コルレオーネが襲撃されたことを知った場所であり、まるで時間を超えて突然アル・パチーノと出会ったような感動であった。

映画だけでなく歴史の教科書で聞いた場所、現在の世界の政治史に残る場所が多く実際に存在し、現代の世界史と自分が繋がったような、そんな感動を何度も感じることもできた。そしてこの行程中、残念なことは通貨の弱さによる物価の高さを強く実感したことであった。現地の日本人と話すとき購買力の低下はあらゆる意味において日本人の相対的な立ち位置の弱さにつながっているとのことであった。

大統領選挙に関しては、この 1 週間の行程中、例えば郊外を走るバスの中からトランプ支持者が旗を掲げて数十台という長い車列を作って走っていたり、郊外の多くの家にはトランプ支持の看板が立てられていたり、見る限り、接戦というよりもトランプ支持者のほうが多くいるように感じた。日本で報道されていることと現地の温度差が大きく、結果は大統領選挙の結果を待たないといけなが、現地視察の重要性を改めて感じる事象であった。

最後に、例年の視察と異なり、国境をあるいは都市を跨いで移動がなかったことは、経済視察団としては物足りないとの事前の意見もあったものの、結果としてはむしろ良い選択だったと思う。なにしろこの国、呆れるほど広い。数都市を視察しようと思うと、国内移動だけでもアジア諸国の面積を考えれば幾つかの国境を越える移動のようなもの。それでは何かを学ぶどころか移動だけで膨大な時間を使ってしまう。多くの指摘を受けつつ、せつかくの 1 週間を有効に使うために一都市に留まるという大きな判断をされた委員長に、心から敬意を表したい。

◆【視 察】J F K空港視察（日本航空）

川西 亮平
(株)トータテホールディングス
代表取締役社長

【空港へ向けて出発】

私たち、広島経済同友会米国（ニューヨーク）経済視察団は現地時間9月24日午前、今回の視察に於いて最後のミッションとなるJ F K国際空港を視察するべく、宿泊ホテルのあるマンハッタン中心部からバスで出発した。当日は国連総会開催中でありマンハッタン中の道路混雑が予想されたため、バスは中州の西側を迂回するようにして空港へ向かったが、それでも途中渋滞にはまりながら1時間強の時間をかけて到着した。

【空港全体現況】

ジョン・F・ケネディ国際空港（以下J F K）は、L G A（ラガーディア空港）、E W R（ニューアーク・リバティー国際空港）とともに巨大都市ニューヨークの空の玄関口であり、アメリカを代表する国際空港のひとつ。2023年の利用者数順位は世界第13位、アメリカ国内では第6位で、上位にはジョージア州アタランタ国際空港やテキサス州のダラス・フォートワース空港などがある。都市の大きさに比べ順位が低いのは近郊の2空港と利用者を分け合っているのが要因だそうだ。

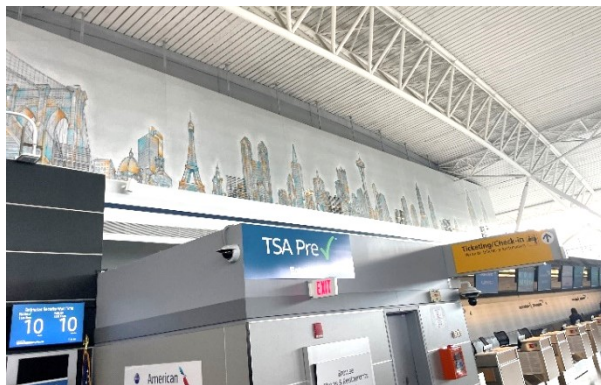
現在、4本の滑走路を、ターミナル1、4、5、7、8の五つのターミナルで運営されており、面積は約2,100haで成田国際空港の約2倍もある。各ターミナル間は「エアトレイン」という乗り物で接続され、24時間無料でターミナル間の移動が可能となっている。そのため、来日したニューヨーカーが羽田空港のターミナル間を走るモノレールを無料と勘違いしてしまうトラブルもあるようだ。



【日本航空の入るターミナル8の概要】

2022年に約4億ドル（約580億円）をかけて再開発が完了したターミナル8。このタイミングで移転したブリティッシュ航空と共同でラウンジを一新し、さらにイベリア航空、日本航空（JAL）が2023年5月末に移転してきた。それまでJALは、現在工事中のターミナル1を使用していたが、One Worldのアメリカン航空と同ターミナルになったことで乗り継ぎのお客様の利便性が向上したという。今後、レストランやショップなど約1.25億ドル（約180億円）の再開発が計画されているが、後述するその他ターミナルの再開発とは見劣りがするため、それ以外のサービス拡充も検討していくそうだ。

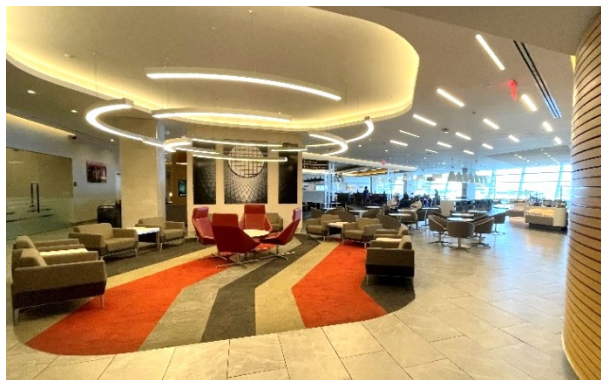
ターミナル8の運航便数は出発ベースで約140便/日で全ターミナルの中でも比較的小さい方。実際に利用した印象も、保安検査場に入るまでの空間は福岡空港の国際線と同じくらいの印象だ。保安検査場通過後はJALの厚意でラウンジを利用させていただき、シャンパンやワイン、数種類のビールなど飲み物も豊富でニューヨークらしいデザインの家具も相まって非常にゆったりとできる空間だった。日本の空港と違い、国際線と国内線が同じターミナルを利用するため、保安検査場通過後の免税品の買い物はその場で商品を受け取れず、搭乗ゲート通過後に受け取らなければならないようだ。



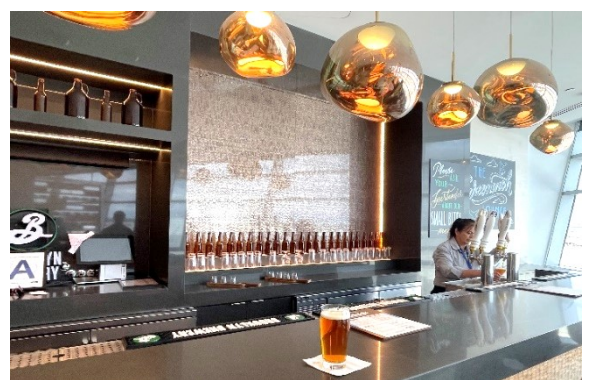
ターミナル8の壁面



ターミナル8のトイレ壁面



ターミナル8 ラウンジ

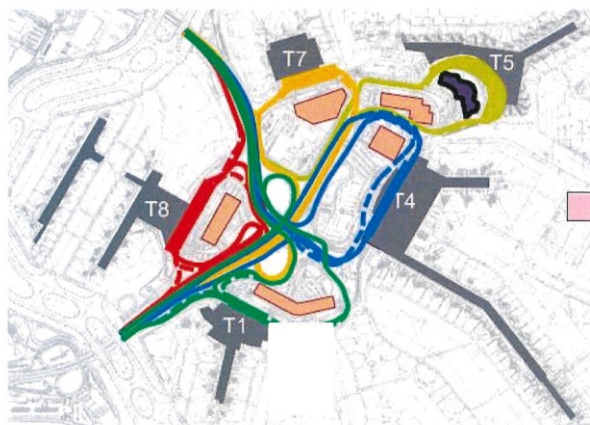


ラウンジ ドリンクカウンター

【今後の再開発計画】

JFK国際空港は1948年にオープンし、1963年に暗殺されたジョン・F・ケネディ大統領の栄誉を讃え同名称へ変更された。これまで多くの費用がかけられ空港の形も変遷してきたが、今後もWorld Class Airportを目指し、道路・駐車場等も含め、190億ドル（2兆7,000億円）規模の再開発が予定されている。

<現在（2023年）>



< 2026～（2022年時構想）>



《ターミナル1》23 ゲートあり、エールフランスや大韓航空が主航空会社。今後は 95 億ドル（1 兆 4,000 億円）を投じ、約 27,870 m²内に店舗やラウンジ、レクリエーション施設を建設予定。NY 市内、全米空港内最大規模の太陽光パネルを設置し、停電時でも 100%自家発電可能となる。2026～30 年にかけて段階的にオープン予定。

《ターミナル6》10 ゲートあり、ジェットブルーやANA（全日本空輸）が主航空会社。今後は 42 億ドル（6,000 億円）を投じ、約 9,000 m²内にニューヨークに特化した店舗やレストランを建設予定。2026～28 年にかけて段階的にオープン予定。

Terminal 1



Terminal 6



【視察を終えて】

今回はターミナル8のみの視察となったが、空港全体でみるとさすが世界都市ニューヨークの玄関口だけあり、規模の大きさに感嘆した。ターミナル8では顔認証システムも導入されており、9・11以降のセキュリティの高さも感じる事ができた。

全体の視察を通して日本では感じる事の出来ないニューヨークの活力や大統領選への熱気などが感じられ大変貴重な経験となった。また同行させていただいた多くのメンバーの方と長い時間を過ごし、共通の体験をするなかでご縁を深めることができた。武田団長、小田副団長をはじめとする同行メンバーの皆様、視察先にてご対応いただいた企業関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

◆【所 感】ニューヨークの食

小川 恭史

日塗(株)

代表取締役

佐藤 卓己

(株)サンエス

代表取締役社長

杉之原 祥二

(株)マナック・ケミカル・パートナーズ

取締役会長兼社長

《夕食編 1》

ニューヨークのタイムズスクエア近くの 1926 年創業の超老舗のステーキハウス「フランキージョニーズステーキハウス」にて、ステーキのコースをいただいた。

まずは前菜のシュリンプカクテルから。写真ではわかりにくいかもしれないが、エビの巨大さにびっくり。ステーキは赤身で若干焼過ぎ感も感じたが、さっぱりとおおいしくいただいた。あとはパンとデザート、いきなりアメリカの食事のボリュームに多さを実感した。



《夕食編 2》

マンハッタンはミッドタウン 44 丁目のイタリアンレストラン「カーマインズ」に行った。大きなお店だったが、観光客や地元のお客さんでゴった返し、超満員だった。家族連れやグループのお客が多く、お誕生日のサービスがあり、あちこちでハッピーバースデ이의歌が歌われていた。

料理は前菜のモッツァレラチーズとトマトソースに始まり、フライドポテトみたいないんげんのフライ、ラザニア、ペンネのトマトソース、エビのトマトソースなど、ほとんどトマト味だったが、どれも素朴な家庭料理風のもので、おいしくいただいた。ただ、どれも量が半端なく多くて、とても我々日本人には食べきれなかった。



《夕食編 3》

最終日の夕食は、エイジングビーフの元祖とも言われる高級ステーキの「ベンジャミンステーキハウス」(日本にも出店しています)に行った。ここでは前菜はロブスターのボイル、続けてカニクリームコロッケのようなもの、そしてメインのポーターハウスステーキと続いた。ここは焼き方も素晴らしく、量も適度で大変おいしくいただいた。

お店の雰囲気も素晴らしく、高級ステーキハウスを堪能した。



	ニューヨークの昼食							
		【昼食】					【夕食】	
9/19(木)	『Superfine』 126 Front St, Brooklyn, NY							
	JFK空港到着後、バスで直接ブルックリンへ。							
	NYグルメツアーの始まりは、いきなりチキン・ハンバーカー 2 個から。							
				夕食は『Frabkie & Johnnie's Steakhouse』				
9/20(金)	『Bill's Bar & Burger』 16W 51th St. NY							
	ロックフェラーセンター1Fの、2009年開業の大型ハンバーガー店。							
	クラシック・チーズ・ハンバーカーで、味も店もこれぞNY。							
				夕食は『Carmine's Times Square』				
9/21(土)	『Dassai Blur Sake Brewery』 5 St. Andrews Road,Hyde Park							
	ホテルからバスで2時間の、ハイドパーク市にある獺祭のNY醸造場へ。							
	岩国の獺祭ではなく、独自の『獺祭ブルー』味の大吟醸酒を2023年から製造。							
	工場見学後、すし職人が握った鮨を食べながら、 3 種類(精米率23%・35%・50%)							
	の大吟醸を試飲。							
				夕食は『Jazz Club Birdland』				
9/22(日)	『Tang Pavillion (山王飯店)』 65W. 55th St. NY							
	蒋介石の家族が1963年にオープンした、クラシック上海料理の老舗。							
	青島ビール、紹興酒を呑みながらの本格的中国コース料理。							
				夕食は『Blur Fin』				
9/23(月)	『Restaurant Nippon 』 155E 52th St. NY							
	1963年開業の本格的日本レストラン。							
	久々の和食弁当で、胃も一息。メニューには、SHOKADO BENTO \$ 45の記載。							
				夕食は『Benjamin Steakhouse Prime』				
昼も夜も、シュリンプ・クテルのシュリンプの大きさと数に食傷気味。								
食事中は時差による睡眠不足も吹っ飛び、暴飲暴食で、和気あいあい盛り上がっていた。								

～ お わ り に ～

広島経済同友会同友会

米国（ニューヨーク）経済視察団

副団長 山本 慶一郎

((株)中国新聞社 社主兼常務取締役)

国際委員長に就任した 2019 年から、いずれは共同通信社の元駐在員として勝手知ったる米ニューヨークに皆様をご案内したいと考えてきた。コロナ禍の影響などにより実現までしばらく時間がかかったが、長年ひそかにあたためていた視察案を 2024 年に実現することができて、喜びもひとしおである。このタイミングとなった理由としては、4 年に 1 度となる米国最大のイベント・大統領選挙の年を迎え、ぜひこのタイミングで選挙戦の熱気を肌で感じたいと考えたことが大きい。さらにはロシアのウクライナ侵攻やイスラエル軍のパレスチナ自治区ガザでの戦闘など国際情勢が不安定化する中、変わりゆく超大国・米国の現在の姿を経済や文化も交えた様々な視点から視察したいという意見があり候補地に決まった。

前半のハイライトはやはり三井不動産が大きく関わった再開発エリアの視察だろう。1800 年代にダウNTOWNから徐々に開発が進んできたマンハッタン島。そこで最後まで開発されずに残っていたのが、ミッドタウンとチェルシーと呼ばれるエリアの間にあるハドソンヤードとよばれる地区だ。2012 年に建設が始まり、現在もプロジェクトが進行中の最新のオフィス街だ。民間企業として米史上最大の約 250 億ドルもの資金が投資されただけあって魅力的な複合施設が立ち並んでおり、超一流都市の街づくりにかける意気込みに団員一同大きな刺激を受けた。現地で対応していただいた方から「今後も高い経済成長が続くため、少々の失敗は取り戻せる。だからリスクがあってもプロジェクトが進む」と聞いた時には正直羨ましく思った。街外れのエリアだが、ブラックロックやフェイスブックが入居しており、オフィスの賃貸料は市中心部より高いという。4 日目に訪れた米同時多発テロ事件の現場にある 911 記念館では、原爆により壊滅的な被害を受けた都市の住民として、様々な感情を抱きながら視察を終えた。

焦点だった大統領選挙の行方では、私の共同通信時代の先輩である武井徹氏が講演のためにワシントンから駆けつけてくれた。支持率の推移だけを見ればハリス氏とトランプ氏の支持は拮抗しているが、世論調査は精度の問題が指摘されており、武井氏によると「調査結果は民主党に 5 ポイント以上有利」だという。ふたを開けてみれば、大統領選挙はトランプ氏の圧勝に終わった。政策や外交など、様々な分野で矢継ぎ早に大きな転換方針が打ち出されており、世界情勢はさらに先が読みにくい世界に突入している。

今回の視察は広い米国の中でもニューヨークのみだったが、結果としてゆったりとしたスケジュールを組むことができた。ハーレムからウォール街まで様々なエリアが散策できたため、参加者は自信を持って「ニューヨークには詳しい」と言えるようになってもらったと思う。またニューヨークは世界で最もリピーター旅行者の多い都市のひとつ。見どころも沢山あり、団員の皆様の満足度もとても高かったと聞いて安心したところである。参加者の中には 20 年以上前、自社の海外支店としてマンハッタンに進出して勝負されていた方もおられたのにはびっくりした。あらためて同友会の層の厚さに驚かされたところだ。

あえて問題点を挙げるとすれば、会員企業の皆様に費用面で大きな負担をおかけしてしまった。外国為替市場の円相場で急速に円安が進行(旅行代理店の決済時：1ドル＝160円前後)したことが大きい。結果として大変申し訳なく思っている。そのぶん、今回の視察で得られた知見や街の再開発に関するヒントなどを、広島地域の活性化に役立てていくことをお約束したい。またこの度、ご協力いただいた企業の皆様に改めて御礼を申し上げます。ありがとうございました。